

橋詰空間を活用するウォーカブル滞留空間創出の検討 －法政大学エコ地域デザイン研究センター－

目 的

ウォーカブルまちづくりについては国が提唱していることもあり、全国約 300 の自治体が名乗りをあげ、半ば狂信的に検討され、社会実験が進められている。当事業についてもその一環であることは確かではあるものの、実は当研究にはやや長い経緯がある。現在（公財）都市づくりパブリックデザインセンターにおいて、「アーバンパブリックスペース研究会（UPS 研究会）」がおかれ、国土交通省をアドバイザーに迎えつつ、関係するコンサルタント会社等が集まって、ウォーカブルまちづくりの組織的な検討がなされている。UPS 研究会には前身がある。これは（公社）日本都市計画学会認定社会連携組織「APS (Action for Public Space) 推進会議」といい、この APS 推進会議には「千代田部会」が置かれ、主として日本橋川沿いの地域に着目して歩行者にとって快適なまちづくりを検討していた。当事業は同推進会議が提唱した整備のあり方を実践に移すために実施したものである。

研究内容・結果

千代田区の水道橋～お茶の水～秋葉原から南側の地域については、広幅員歩道を持つ道路がネットワークされ、それらに囲まれるブロック内の細街路沿いに多様な都市機能が展開し、総じてウォーカブルなゾーンとなっているが、靖国通りを超え、日本橋川までのゾーンについては、靖国通り以北に比して、そういった傾向は弱い。千代田区ではそのような状況に対し区道である神田警察通りにおいてウォーカブル施策を展開中であるが、当事業はそれをさらに日本橋川沿いまで引っ張るために、日本橋川に係る橋の橋詰空間に着目してここに歩行者の滞留場所を創出しようとするものである。

当初千代田学の企画段階では、対象地としていた錦橋左岸上流側広場は区道敷ではなく都管理空間であるため、この場所以外での展開に企画変更をしていたが、事業を進める中で東京都第一建設局とコンタクトを取り、少なくとも検討の対象とすることまでは了解をえられたため、当事業の対象地は同橋詰広場として、これまでに2つの事業を展開している。

一つは、実測図の作成である。3年生のゼミナールの授業の一環として大学院生の協力も得て10余人で現地をくまなく図り、現況平面図を作成した（未だ精査中であり公表はできない）。

もう一つは周辺の街に居る人にとって、この場が「居場所」となりうるかについての調査である。調査は2種類行い一つは私たちの校舎である法政大学市ヶ谷田町校舎に出入りするまちづくり系の学生、専門家に対して、まちの中の居場所に求めることを聞いた。もう一つは現地に赴き、街行く人にこの場所の居場所としての期待、可能性について聞いた。

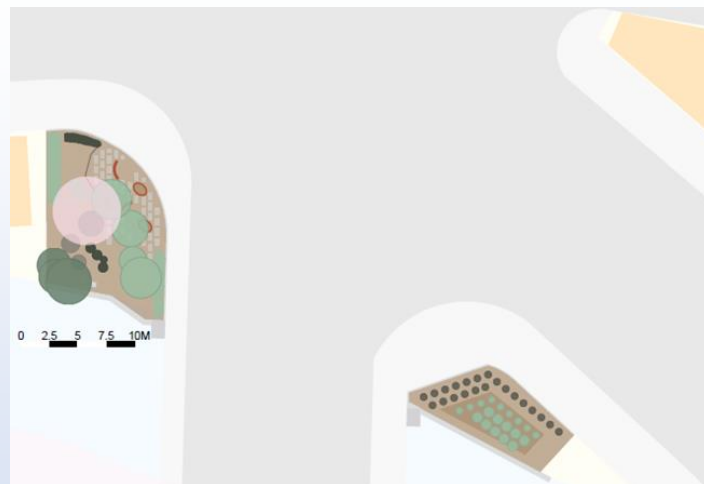


図 1 対象地実測図



図 2 現地アンケートの結果

考察・まとめ

今年度はこの二つを千代田学の成果とするが、その先は千代田学の枠組みを離れ、法政大学エコ地域デザイン研究センターの独自研究としつつ、日本都市計画学会連携組織である APS 推進会議と協力しつつ、検討、調整等を行っていく予定である。